
空のない月

がらくた。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空のない月

【Nコード】

N1809A

【作者名】

がらくた。

【あらすじ】

何の変哲もない時間を過ごしてきた何処にでもいるような学生・千草式。彼は彼を知らない。本当の彼の存在に気付かないままで今まで生きてきた。そんな彼の力は何なのか、彼は彼であるのか。千草は彼を知ることになる。

偽証（前書き）

読むときの注意。

- 1、がんばってください。
- 2、後ろに気配を感じたら逃げてください
- 3、一歩下がって二歩下がってください

偽証

月夜に満月、実にいい。そう思ったのはいつからだろう。

始めは視界から入る闇が身体を止めていたけど、今は違う。

今は、その闇が心地いいくらいだ。刺さるような風の冷たさに身ぶるう

この感じはいい。まるであの日のようだ。

雲が晴れ、大きな、真ん丸の月が顔を出す。

シャワーのように注がれる月明かり、この明かりも好きかもしれない。

見透かされるようなこの感じ。嫌いではない

そう思うのはなぜだろうか？自分でもわからない。

やはり矛盾する。自分のことがわからないなんてとてもじゃない笑ってしまう。いままで16年生きてきて自分のことに気付かないなんて

自分を哀れんで笑っているのか、それとも自分の無知に笑っているのか
それさえもわからないなんて。

そろそろ寢床につこう。夜風は身体に悪いらしい。誰からの入れ知恵だろうか。

窓を閉め、カーテンを閉める前にもう一度月を見た。綺麗だ、いつ見ても飽きない

まるで自分を映し出すみたいだ。そういえば僕は誰だっけ？

……そうだった、僕の名前は式、千草 式。

目が覚めた。目覚めが悪いのか、まだ視界がぼやけている。なぜかいつもより一時間も早く起きてしまったらしい。だが、二度寝はいけない。

二度寝をして、起こされるまで起きた覚えがないからだ。

朝食を軽くトースト一枚で済ませ、学校へ向かった。しかし、まだ眠い

いつもより早い登校。周りにはまだ誰もいない。

「やっぱりまだ早すぎたか。遅いよりマシか」

自分の教室につき、自分の席に座る。やはりここが一番落ち着く。愛着なのだろうか。この場所がいいのだ、と自分で思っている。

ガラガラッ！と後ろの扉が開いた。

「お、珍しい人物がいるな。いつもは隠れるが如く教室に入る君が一番とはね。」

朝から嫌味を言われた。「あれ」はダチの緋楊 祭だ。用は腐れ縁。小学からの付き合いで、高校は祭のほうがいいところに行けたのだが「お前がいなかつたらん」と

それだけの理由で同じ高校にしたのだ。たしかにあいつといると飽きない。

「なんだ、祭か。開口一発目から嫌味とは結構なことだな」

少し殺気に似た空間を作ったが、祭には関係ないみたいだ。あいつにはもともとそんなこと考えていないのだ。

「なんだよ、ノリが悪いぞ？どうせお前のことだからなんとなく早かつただろ？」

ほらね、殺気とどいてない。呆れて殺気を消す。

こういうやつにはこれが有効的だ。

「……寝る」

「おい、まだ授業始まってないんだぞ？今寝たら俺はいつ寝たらいいんだ？」

なにか俺がいつも寝てるみたいに聞こえるが

「じゃあ、今のうちに寝ればいいだろ？そら、寝れ」

「そっか、それもそうだな。」

こうして二人そろって教室で寝るのだ。一時間目は……いつか。

真性・2

午前の授業は退屈だ。理由はないのだが退屈なのだ。

特に国語なんてものは退屈で仕方ない。知っている知識を高めて何の意味があるのだろうか。

しかし、単位は落としてはならない。成績がいまいちなのは自分でも理解しているつもりだ

(だからといって、僕は自分の生理反応を抑えるなんて思いはしない！！)

教科書を前におき、隠れるようにして眠る。

そして、僕の後ろの席では祭が先に寝ていた。

「んんっ・・・よく寝た。」

昼休みになったと同時に起きた。もう身体が覚えているのだろう席を立ち、食堂へ向かう。今日はうどんの気分だ

食堂へと続く廊下。他の人は個々で移動したのだろうか誰も居ないようだ。

突然、視界の色がなくなり

ぐにゃ！と空間が歪み、その場に膝が落ちた

「え・・・？なん・・・だ・・・よ・・・これ・・・」

吐き気がする。ここでは自分でいられないような気がする。

まるでここだけ死んだような感じ

動けないのではない、これは本能で動かないのだ。

あきらかに次元が違う。ここは自分の入れる場所ではないことがすぐにはわかった。

視界が戻る。ようやく正気に戻れた。

あれはなんだったのかわからないが、いやな予感がするのはわかっていた。

早くないかで紛らわせなければ身が持たない。食堂へ急いだ。

「遅かったな、何してたんだ？」

そこには一足先に祭が来ていた。

「僕にだって事情があるんだよ」

景色が歪んだなんていっただら嫌味を言われるに決まっている。

そんなのはこつちから御免だ。それに信じてくれるはずもないだろう
食券を買い、注文して席に着いた。今日は力うどんだ。

『・・・次のニュースです。昨夜未明、風鳴市で男性3人の死体が見つかりました。』

被害者は全員両腕がなく、出欠多量で亡くなった模様で・・・』

テレビからのニュースに耳を傾けていた。殺人らしい。

餅を噛み切る途中で、テレビを見ていると祭が

「しかし酷いよな。両腕なしで放置なんてな。生き地獄だぜ。」

「たしかに。なんで止めを刺さなかったんだろう。」

「お前、今のはかなりぶっ飛んでるぞ。ま、いいけどさ。なんていうか

かなり恨んでたんだろうな。じゃなきゃここまでしないだろうに。」

カレーを食べながら祭が答えた。確かにいうとおりだ。

一時的な感情なら致命傷か殺しているはず。しかし、こいつは殺さないでいる。

相当恨んでいるか、明らかに狂っているやつだ。

そう思いながら、最後のつゆを飲み干して食堂を後にした

午後の授業を軽く流して（聞いていないのだが）放課後になった。
誰もいない校舎。この孤独感は好きだ。理由なんてない、ただ好き
なんだ。

時刻が6時を回ろうとしている。

「そろそろ帰るか、遅くなるといけないし」
外は日が落ちる寸前、家の中から薄っすらと藍と朱の太陽が顔を出している。

いつもの通学路、人通りはまるでない。ここだけが隔離されている感じ

今日も風が冷たい。これで家に着けば一日が終わるんだ。しかし、「まだまだ、まだいやな予感がする。昼に予感は終わったと思ったんだけどな・・・」

明らかに視られている。相手の意思でこっちが潰されそうだ。鳥肌が立つ

昼のやつと同じやつだろうか。 いや、違う。あれはこんなのは次元が違う

場所なんて関係、動いたら殺される。本能を脅していた。

でも、これは動けるんだ。あいつじゃない視しているだけだ

「少し急ごう。ここにいたら命がいくつあっても足りない気がする」走り出す。早くここから逃れるために。

家に着いた。息は荒く、自室に戻りベッドに倒れ掛かった。

このまま逃避したい、そう思ったが無理だろう。あれはどこまでも追ってきそうな気がする。

「くそっ・・・僕が何をしたっていうんだよ」

少し落ち着こう。きつと疲れているんだ、そうに決まっている。

母に一言いって風呂に入った。安らぎというのはこういうことをいうのだろう

落ち着いた。こういうのは人の特権だと思う・・・

テレビを見たが、昼にやっていたニュースを見ていたため自室に戻った。

本も読む気にならないし、ゲームなんて持っていない。妹も帰っていない

部活なのだろう、その後電話で遅くなるというてきたのだ。

「最近遅いよな、なにやってるんだか・・・」
何もすることもない、あとは寝るだけ。

時計を見たが、まだ9時過ぎだ。高校生が寝る時間ではない。
しかし、することがないのも事実。この場合優先すべきは・・・

「寝るか。することがないんだ、仕方ないさ」
居間にいる親に挨拶をして、ベッドについた
今日を忘れるために、明日を望むために

偽証・2

夜はいい。すべてが近く、そして遠くに見える。

闇は集い、結晶として具現する。あるモノを黒で染め上げるのだ
「はああ・・・今夜も俺は求めるのか・・・自身の存在を・・・」
月は頭上に、手を伸ばせばすぐそこにあるようだ

道々には街灯だけが道を示す。町はまだその明るさを保っている
こんなにも・・・月が・・・明るいというのに・・・

夜の街には人が群れていた。気が狂いそうだ、反吐が出るようだ
ギリツと拳を握り締め、その感情を抑えた。

「あそこへいこう。ここはダメだ、気が狂う」
夜の道を歩き出す。この感情を抑えるためにもここを去るのだ

夜の公園。誰もいない自分だけの空間。

あそことは違う、この孤独感だ。眼を細める。

「俺は偽証だというのに、なぜここにいるのだろうか。」

その場所に問いた。答えるものは誰もいない

当たり前だ、人を避けてきたのだからいるはずがないのだ。

・・・人の気配だ、周辺に撒いていた殺気を消した。

群れた男たちだ、15人はいるだろう。まったく不愉快だ
せつかくここに来たというのに、これでは台無しだ。

あいつらは腐っている、これは事実だ。いらぬのだ。

クロス、クロス、クロス、クロス、クロス

男たちは笑っている。こちらには気付いていないようだ。
そして一人の男がこちらに気付いた。

「あ？なんだ、お前。なに見てるんだよ！！」

虫唾が奔る

「なんとかいえってんだよ、おい！」

「……黙れ」

「あ？んだって？」

！！

瞬間、男たちが退いた。

これは本能だ、人間の本能。

自分達の前にいるものが自分達の死だと気付いたのだ

「さあ、抵抗してみせろ。もしかしたら逃れられるかもしれないだ
ろ」

逃れる？無理だ、できるはずがない。彼の瞳に見えるのはきつと無
いのだろう

すでにこちらの後の姿しか視えていないはずだ。

しかし、抵抗した。一人の男が殴りかかった。目の前の死は避けは
しなかった

上半身右半分を抉り取られたのだ。殴りかかったはずの拳は完全に
消えていた

そして、残った男たちを凝視した。

「

！！」

言葉さえ上がらなかった。まるで風が吹いたかのように
刹那の隙さえ与えずに、終わりを告げた。

「あああ……満ちてくる……月が紅く染まっっていくよ……」

鋼の瞳

眼が覚めた。今日はいい感じの時間に起きた。時間も申し分ない居間には朝食が用意してあり、それを食べる。味噌汁が染み渡るようだ

「いつてきます、今日も同じぐらいに帰ると思うから」と言い、家をあとにする。

ここから学校までは20分ぐらい掛かる。今の時刻は7時10分いつもと同じ時間に起きたのに出る時間が早くなっている

「・・・もう年かな。月日が流れるのは怖いな」

学校に着いた。時刻は7時35分、周りにはいつも早い生徒しか見れない

教室のドアを開ける、まだ誰もいないよう・・・いや、この感じは「よお、今日も早かったな。もう年なんじゃないか？」

祭、いちいち鋭いやつだ。そして、今日はもう一人いた

「そうだねえ、千草くん時間に正確だけどいつも8時過ぎだったもん」

おっとりした口調で話してきたクラスメイトの女子。湯口 沙耶だ彼女はいつも早い、昨日は来る途中で一度忘れ物を取りに帰ったそうだ。彼女らしい。

僕と祭、沙耶はいつもつるんでいる。沙耶は小学3年からの付き合いになる

(たしか修学旅行もこのメンバーだったっけ・・・運命かな)

挨拶を交わし、自分の席に座り教科書をいれていく。ほとんど使わないのだが

持つてくるに越したことは無い、保険というやつだ。

「ところでよ、今日のニュース見たか？公園のやつ」

「ん？なんだよ、それ。」

「昨日またあつたらしいよ、殺人事件。今度は隣町だつてえ」
「そうだ、いつのと同じ時間に起きたけど早く出たんだつた。」

「で、内容は？また両腕がないとか」

「いや、今度はもつと酷いぜ。なんたつて15人全員上半身右が抉られてたらしい」

「なっ！ありえない。とても人間のできることじゃない。」

「そいつは完全に狂っている。たぶん・・・」

「次はこの町だよねえ・・・たぶん」と、いきなり凄いことを言い出した沙耶。

「なんでそんなことわかるんだよ。ま、まさかあああー！」

それを茶化す祭、こいつはこいつで馬鹿だ

「わわっ！そんなことないよあ。ねえ、式くんもそう思うでしょ？」

そろそろだと思っていたが話を振られた。確かにそうだろうがしかし・・・

「まさか・・・そんなことだったなんて・・・」

「わああああ、二人がいじめたああ・・・」

ホントに泣き出す沙耶、まるで変わらない。あの日々とまったく同じ風景

そのときがいつまでも続けばいいのにと願ったあの時間。今更だな

「おい、どした。またボケたか」

祭と・・・沙耶と・・・僕と・・・あれ、あと一人。誰だ、記憶にはある

そう、記憶にはあるんだ。でも、わからない。

「なあ、あと1人。あと1人いつも一緒にいたよな。中学のときまで一緒に」

「え、あ・・・たしか。高校入学と同時に引越したんだよ。風鳴に」

そうだったのか、すっかり忘れていた。あんなに・・・あんなに時

間を過ごしたのに

人間っていうのはこつも都合よくできてるのかな。

「名前は・・・ああ・・・雛見だ、雛見 向^{むかい}」

「あ、そうだよ。読み方解からなかったからコウちゃんって読んでたんだっけ」

「そうだ、彼だ。今なら彼の顔を思い出せる。よかった、ホントによかった」

「そう思うと心が開放されるようだった。」

「たしか妹もいたんだよねえ、いつも式くんべったりで」

「そうだったな、向より好いてたからな。」

「し、しかたないだろ。ほっとけないだろ?」

顔を赤らめる。さすがに恥ずかしいさ、思い出だとしても恥ずかしいそうさ、忘れたってあるんだ。思い出はいつもそこに、仲間がいるんだから。

午前の授業が終わり、昼休みに入った。今日も食堂へ向かおうと思
ったが

昨日のこともあったので祭にパンを買ってきてもらうことにした。

「パシリかよ、まあいいけどさ。で、何がいい？」

「できれば軽いやつ。こつてりしたのは午後に触るからね」

了解、と教室をあとにする祭。そのついでに沙耶も頼んでいた

待っている間、沙耶と話していた。こうやって女の子と話してる男
子は

クラス内で僕だけだった。かなり気まずかったが、沙耶は関係ない
みたいだ。

すると、沙耶が・・・

「さっきね先生に聞いたんだけどね、明日、転校生が二人来るんだ
って」

「ふうーん、女子？男子？」と、とりあえず聞いてみた。

「なんかね兄妹なんだって。楽しみだね」

満面の笑みをくれた沙耶。こちらも そうだね、と相槌をたてた
実際、どちらでもかまわなかった。クラスが増えるだけなんだから
でも、彼女の笑みを裏切れはできない。なんていうか、幼いのだ。

「おーい、お二人さん。親友さしおいて団欒か？いい関係なこと」
こいつはなんてタイミングであられるんだ。

「・・・いつから見た。正確に答えてくれ」

「ああ、お前が沙耶の笑みに答えてたところからだ」
恥ずかしい、いつそこから消えたかった。

ドクン、ミシッ！

「がっ・・・！あ、あぐ・・・」

来た、昨日のあの感じだ。

「おいおい、いくら逃れたいからってその演技じゃ無理だぜ」
笑いながらこちらを見る。無理だ、息ができない。

「ねえ・・・ちよっとおかしくない？いくらなんでもこれは演技じゃ

・・・」

潰される、眼が烧ける、臓が裂かれる。イメージが伝わってくる

「おい・・・しつかりしろよ。おい、千草！！」

「ほ・・・保健室に・・・つれていこ、ね？」

駄目だ、足が・・・動かない。

ミシッ、ミシミシッ！

「が、はああ・・・！ああああ・・・」

くそ、まただ。また視界の色が・・・きえ・・・る・・・

二人は、肩に身体を乗せ、保健室に連れて行った。

声が、声が聞こえる。なんかいつも聴いている声だ。

「……い。おい、千草！目覚ませよ」

ああ、今起きるよ。だから少し待ってくれ。

「しい〜、ダメだよ。式くん起きちゃうよ」

「起きていいんだよ、莫迦！！たく、不吉なこと言いやがって……」

「うわああああ……マツがいじめたあああ〜」

泣き出す沙耶、それをみてさらに怒る祭。

「……うるさいよ、ろくに寝れやしない。」

ようやく起きた。身体感覚もだんだん戻ってきたでも、眼はまだすこし痛むみたいだ。

「あ、式くん戻ったんだね〜、よかったあ〜」

「千草！！大丈夫か、まだ痛いところあるか。」

気付いた二人が駆け寄ってきた。よかった、本当によかった

ここへ帰ってこれで、またこの日へ帰ってこれで……

「ん、まだ眼がちよつと痛むかな。でも、沁みるぐらいだから」

「ダメだよ〜、ちゃんと痛いところは診てもらわないと」

沙耶が心配そうに言う

「でも、保健の木嶋先生どっかいったからな」

「だから、心配ないって。さ、授業いこう。」

「……」

二人とも黙り込む。

「ん、どうした。行かないの？」

「あのね……いまね……えつとね……」

「千草、残念だったな。実に惜しかった。」

何なんだ、この二人は。祭、お前はなに笑ってるんだ

「あのね・・・いま5時なの」

「・・・え？」

まさか、そんなに経ってたのか。

「ま、そういうことだ。お前は午後の授業は欠席扱いなんだ」

「なっ！それ本当か？」

二人は頷く。これは痛い。午後の授業分を挽回しなければならぬ
起きた早々嫌な事ばかりだ。

「あ、やっぱりへこんだね。」「あいつはあいつで真面目らしいか
らな」

後ろで何か言われている。

「でもでも、いつも寝てるよね？」「だから、あれがあいつなりな
んだよ」

「ええい、うるさいぞ！」

さすがに止めないといつまでも後ろで言われそうだったので話を止
めた。

二人と別れて、通りがかった公園に立ち寄った。

別にここへ意味はない、ベンチに座り星を見上げた。

今日の星は綺麗だ。雲ひとつなく、どこまでも澄んでいる

(綺麗だな、こんなにも星が綺麗に思えるなんて)

ベンチを立ち、公園をあとにした。

「今日はなんか長い一日だったな・・・どつと疲れたような気がす
る」

はあ、とため息をつき、ゆっくりと歩き出す。

突然の鼓動、色の無い世界、あるはずの無いイメージ

これは何かの前兆なのだろうか。それは誰も知らない。

「ただいまー・・・って、今日は遅番だったな」
鞆を部屋に置きにいき、居間に戻る。

「テーブルには紙に”先に食べてね”と書いてあったが

「何もないじゃないか、何か作っておきばいいのに」

ブツブツ言いながら冷蔵庫から麦茶を取り出し、残しておいたパンを取った。

ソファーに身体を崩し、麦茶をコップに注ぐ。

（ただいま・・・あれ、いないのかな？）

「ん、美久？今日は早いんだな。部活はどうしたんだよ」

ソファーから上体を起こし、美久を迎える。

美久は僕の妹だ。最近部活でいつも遅いはずなんだけど

「先生達がね、最近物騒だから部活は中止だつて」

物騒ってもう少しいい表現はなかったのか、先生

でも、賢明な判断かもしれない。相手は確実にこの町に近づいている

それも相手が動くのはいままで夜遅くからしか動いていない

「ねえ、兄さん。何考えてるの？」

「うわあ！」

美久が下から覗き込んできた。顔を赤らめる僕

（いけない、いけないんだ！美久は妹なんだぞ！！）

後ろを振り向くと美久が首をかしげながらこちらを見ている。わか
つていないらしい。

ここにいたらこっちの理性が持つかわからない。

「さ、さきに風呂はいるよ、あはは・・・はああ」

「変な兄さん」

風呂から上がり、部屋に戻る。

こんなに鼓動が早くなったのは久しぶりかもしれない

「はあ、まさか妹に反応するなんて・・・兄失格だな」
ベッドの上でため息混じりにつぶやく。これが異性に対する反応なのだろうか

でも、綺麗になったものだ。むしろ可愛いと言っべきだろう。だからといって、妹に欲出してどうするのだ

「どうするだよ、僕は・・・美久かあ。」

少し頬を赤らめる、兄妹といえど恥ずかしいものは恥ずかしい

「さて、居間に戻るか。たまには一緒にテレビでも見よう・・・え？」

色が・・・消え・・・た・・・

なんてことだ、よりによって家の中でくるなんて!!

今度は眼だけだ。声を上げるほどじゃないと思っただが・・・

(こ・・・こいつは、痛いレヴェルじゃない!し・・・死ぬ)

死のイメージが頭に直接くる。いままでで考えられる一番の痛覚眼の中に何かが入ってくるイメージ。

ベッドのシーツを掴み、痛みに耐えるが、耐えられるものじゃない「があ、つああああ・・・」

眼の色が消える。ベッドから落ちた、完全に視界は色を失っていた

ドン、ドン!!

(兄さん、どうしたの!!・・・入るよ)

「!! 来るな、部屋にいるんだ!」

扉越しに美久に怒鳴りつける。ここへこさせちゃダメなんだ
来たら美久に何をするかわからない。

「いいか、美久。部屋に戻るんだ、そしてら玄関の音がするまで絶対出ちゃだめだ。」

巻き込んだじゃいけない、自分の周りだけは巻き込んだじゃいけないんだ
受けになるのは自分だけで十分だ、自分のことで誰かに迷惑はかけ

られない

「……うん、でも!!」

「いいから、早く部屋に行くんだ!!」

扉を覗む。すると、視界に蒼い線が見えた

その線に神経を集中させ、器かたちを作る

(これは……!! 駄目だ、抑えろおお)

視界の線が消える。いままでの色のない世界に戻った

扉の向こうの気配は消えていた。

「いったか……僕も行かなきゃ」

どこへ、なんのために、そんなのは解からない。

でも、きっと今夜は何かが起こるんだ。だから、僕は行くんだ。

誰かが待つ、僕を呼ぶ場所へ

再来は夜に

頭上には星屑、見下ろしている大きな月
風はなく、静けさが町を包み込んでいる

この闇の中で何かが僕を呼んでいる。それは生き物なのかもわからない

でも、僕はそれに呼ばれている。それだけはわかる。

夜の公園、そこには人の気配はない。

蛾の群がる街灯、人を乗せない玩具。夜の公園はこんなにも寂しく感じるものか

「こんばんわ、こんなところに何の用だい。式」

後ろから声がして振り向いてみると、そこには一人の男の姿があった
髪は染めておらず黒髪で、十字のネックレスをしている。

僕はこの男を知っている。

「風貴・・・兄さんなのか、なんでここに」

驚いた、いままで行方不明だった兄がいま目の前にいるのだ

風貴は笑みをこぼしたままこちらへ近づいてきた

「なんでって、ここは俺の町だからな。帰って来ても不思議じゃないだろ」

「じゃあ、今までどこに行ってたんだよ。5年も帰って来ないで！」

腹が立つ、いままで家を人に押し付けてた兄が悠々と目前にいるのだ
そしてその風貴は笑ってこちらへ向かってくる、不愉快だ

「俺には俺の事情があるんだ、仕方ないだろ？でも、ちゃんと帰ってきたんだ」

「で、何の用で戻ってきたんだ。本当に戻ってきてくれるのか」
兄に敵意をむき出しにする。それでも風貴は動じない、むしろ押し

返してくるようだ

「いやね、ちょっとした用だ。この町に異種が混じってるらしくてね。」

「異種？」

聞いたことのない言葉に戸惑う

「そう、異種は人知を超えたものを持っていたりする人のことだ」

「そんな奴がこの町にいるのか、まさか」

信じられるはずがない、異種？そんなのはお伽噺だけにしてくれ

「その異種がお前の学校にいるらしんだ。そこで・・・」

「僕にもその排除を手伝えと、いうことか」

「そうだ、お前も俺の能力を持っているんだろ？」

なんだそれは。風貴の能力？それが僕にもあるだって？

「まさか、最近ある眼の痛みは・・・その能力と関係が？」

「そうか、お前は眼か。いい弟を持ったもんだな、俺は」

少し大きめの声で笑い出した風貴。僕の眼はそういうことだったのか

なんてこったこれじゃ僕も人じゃ・・・え？

「待って、これじゃ矛盾だ。なぜその異種が異種を排除するんだ？」

そう、その能力を持っていてのだから僕らも異種じゃないか

何故同じもの同士を潰すんだ。

「それについて話すとこれが長いんだ、三日以上掛かるかも・・・」

「

少しふざけた様子で答えるが、それを受け入れるつもりはない

「ちゃんと説明してくれ、僕が納得できるように」

「単純なことだ。異種がいれば一般人はどうなる？自分より強いものに逆らうか？」

「だからって・・・排除することは」

「異種を消せるのは異種だけだ。お前はいつもどおりの生活をしてればいい

俺はまた姿を眩ませれば解決だろ。いまの通りだ」

それでいいのだろうか、本当にそれでいいのか。

「そんなの理不尽だ。何もしてないだろ！」

「理不尽でいいんだ。それも運命って奴だ。さあ、もう帰れ。明日は学校だろ？あとその”僕”ってのはやめろ、お前には似合っていないぞ」

しかたなくその場を去ることにした。去らなければどうなるかわからなかったから

なんて無力なのだろうか、僕は何もできないまま家へと戻った

再来は夜に・2

月夜に照らされ伸びる影、なんて不気味なのだろう

自分なのに自分より大きい姿をしている。まるで怪物のようだ
その影につられるように僕は家路に着いた

家に明かりはともっていない。家族は寝ているようだ

家を出たのは1時ごろだったはずだ。寝ていて当然だろう

音を出さないようにドアを開け、忍び足で自室に戻る

崩れるようにベッドに沈む身体。鉛のようにうごかない

「やっぱあれは幻じゃなかったか。まさか風貴が帰ってくるなんて」
ため息混じりに急に眠気が来た。あの空間で何時間もの集中をした
ような気がする

ちがう、していなければいけなかったのだ。

あの状況で集中を崩したら喰われていた。あの風貴の後ろにいた黒
い影に

「そんな力が僕にも力があるのだろうか・・・あの線が僕の力」
思考が止まり身体が深い眠りについた

「おはよ・・・って、いつもの早朝組しかいないか」

はやめに家を出て、学校に着いた。教室にはいつものメンバーが揃
っていた

その中には祭と沙耶もいる。

「よっ、なんだよ。お前もこれからは早朝組に入るのか」

「おはよ、いつも早いね」

いつもの朝だ。学校に友がいて、同じ時間を過ごし別れる平和な日々
この時間がいつまでも続けばいいのにと願う自分がいた

叶うはずのない希望。僕は彼らとは違うから。僕は・・・俺は異種だ
から

「なあ・・・祭、ちよつと聞いていいか」

「ん、なんだよ。お前から俺に質問なんて聞いたことないぞ」
俺を茶化す祭。

「僕つてのは・・・変だよな。この口調だと俺だよな」

「はあ？」

啞然とする祭。隣の沙耶まで首をかしげている

夜に風貴にいわれて考えていたがやつと自分でも変だと思ったのだ

「そりゃ、まあ変だな。ずつと言つてたから思わなかつたけどな」

「そついえば変だよね。強気な口調なのに”僕”つて」

あきらかに笑いを抑えながら答えている。なんだか悔しい

自分で理解していることだから余計に悔しくて、恥ずかしい

「じゃ、今度から俺でいくかあ。あーかつたるい」

椅子に深くもたれる。なんだか一日の緊張がほぐれたみたいでどつと疲れた

俺はこんなことで悩んでいたのかと思うととても疲れた

円盤

食堂へいく生徒達。世話を賑やかに一時を過ごしている
俺は祭たちと食堂へ行かなかった。理由は「食欲がない」の一点張
りだった

そんな俺を沙耶は心配そうに見つめていたが気にしない。

「俺は・・・ひどいやつだ」

彼女の心配を無視したのだ、その嫌悪に浸りながら机に顔をうずめ
ていた

「どーしたよ。いつもならさっさと食堂にいつてるやつが」

「そんなこといいにここまで来たのか、和志。嫌味ならたつぷり祭
にでも言え」

隣に座ったのは風善時 和志。早朝組じゃないので話すのは休み時
間ぐらいだ

高校からの付き合いで妹思いのいいやつだ。

「つれないな。人生前向きじゃなきゃやってけないぞ」

「お前こそ椿をいっしょじゃないのか。」

「それがよ。いないんだよ、どこにも。教室にも食堂にもいなかった」

心配性にもほどがあると言ってやりたいぐらいだ。

「友達と一緒に食ってるんじゃないのか？」

「いつもの友達はいたんだよ。俺のどこに行くっていったらしんだ」
確かに変だ。なにかあったのだろうか。

「な、暇なら探すの手伝ってくれよ。明日の飯奢るからさ」

「しょうがないな。高いのせびるからな」

席を立ち、教室を出る二人。心配性だ

その心配性がいいところでもあるのだが。

校内は探したということ以外に出る。

校庭には誰もいないみたいだ。となると

「裏か。嫌な感じだな。男かもな」

微笑しながら茶化したのが、和志には聞こえていないみたいだ
眉が下がっている様子ではかなり心配しているようだ

「つばきいっ……どこいるんだよっ……」

弱っている。今は紙のように脆そうだ。

ドクンッ！

この感覚は。いるのか、異種が。

だとしたら和志か。違う、そんな感じがしない

他の場所か。校舎裏からか

「和志、お前はもっかい校内探してる。俺は外調べるから」

「あ、ああ。外よろしくな。見つけたらすぐに知らせてくれよ」

「わ、わかったから。引っ付くなって」

靴箱前でも「知らせるよー」といつている和志。大丈夫だろうか

「いくか、校舎裏へ」

嫌な予感が過ぎる中、校舎裏へと歩き出す

円盤・2

「つばきー、どこいったー。」

昼休みだというのに校舎裏で叫んでいる自分

なんだか少しだけ虚しい気がする。でも、和志と約束したんだ

「なんで約束なんてしたんだろ。こんなことすることなかったのにな……」

不貞腐れながらも椿を探す。あの予感を感じたらそうも言っていない

あの予感はいきらかに嫌な予感だ。身の回りで何かが起こる前触れ
「くそ、どこいったんだよ」

休みもなくなってきたが、まだ椿は見つからない

外をだいぶ歩いて疲れてきた。頬を汗がたどる

「あと行ってない所……旧校舎か。あそこなら誰もいかないな」
走りだす。不安を消すかのように、忘れるかのように走り出す

「はあはあ……あ、つばきー！いるかー！！」

「あ、式さーん」

手を振っている。間違いなく椿がいた

「なんでこんなところにいるんだ。和志が心配して泣き崩れてたぞ」

「え、なんでつて。穂波先生に呼ばれたんですよ。」

なんで先生が、直接職員室に呼ばばいいじゃないか。

何か理由があるのか、あったとしてもなんでここへ

「………シール」

気配に気付き振り向く。目の前に円盤が見えた

「くっ、円盤？ こんなものー！！」

横回転の円盤を下から腕を振り弾く。後ろに椿がいるので避けるわけにはいかない。

スツ・・・

「式さん、もう一枚！！」と言われたが、遅かった
円盤は左腕を裂き、穂波のもとへ返っている

「ん、異種じゃないの？たしかに感じるんだけどな」

裂かれた腕を押さえながら見てみるとそこに穂波が立っていた
周りには三枚の円盤が穂波の周りを回っている。弾いた一枚も返っ
ている

「なんだっていうんだ・・・あんたも異種なのか」

「なんだ、やっぱり異種なんだ。じゃあ、消さないかね」

耳に掛かった髪を払い、鋭いまなざしでこちらを見る

ふざけた口調だが目は大真面目だ

やられる。でも、椿だけでも帰さなければ

(約束だもんな、和志・・・)

「先生よ・・・椿はどうするんだ。関係ないだろ」

「逃げれたら見逃してあげる。でも・・・」

バシンツ、バシンツ、バシンツ

「わたしの円盤シールドから逃げられたらね」

道路と壁が削られ、円盤が増える。円盤の数が十を越えた

逃げ場ははじめからないんだ。敵を倒し、約束を守るために。

俺は、この道を、切り抜ける。

円盤・3

宙に浮く円盤。昼下がりに俺は何をやっているのだろう
いつもと変わらない日を過ごしていたのに、外に出てみるとこれだ
俺がなにをしたっていうんだ。お前になにもしてないだろ。

「ほら、どうしたの？降参なら潔く死になさいよ」

円盤を弾くが、すべて弾けるわけがない。

かすれば服が裂け、当たれば肉が裂ける。こんなことはなかった
いままでこんなことはなかった。あるわけがない。

先生が生徒を殺す、そんなことがあってたまるか。その標的がなん
で・・・

「なんで俺なんだよ！！」

叫ぶ、誰かに助けを求めるかのように。だが、そこには敵と守るもの
のしかない

拒絶する、俺はこの存在を拒絶する。敵とする俺の存在を拒絶する
椿を守り、和志のもとへ帰すだけなのに

「それだけなのに・・・なんで」

「いい加減にいい！」

「なんでお前はそこにいるんだ」

風が吹く、すべてを薙ぎ払うかのように

円盤は舞つのを止め、動かなくなつた。風が、円盤を押ししている

(・・・視える。風の進む道が。これが俺の異種の力か・・・)

血流は速く、体中を循環する

循環した液は、神経を伝い眼を紅く染め上げた。

「これが、あいつの言ってた眼なのか・・・視える」

無数の線が、風を伝い、地面を這い、どこまでも奥へ

その線は創れる。どんな形にでも、たとえそれが、そこに無くても
「そうか、そういう力なのか」

風は止み、円盤が再び宙を舞う。だけど、もう触れることは無いだろう

紅く染まった世界の中心から外へ、外へと黄金の世界が広がっていく
「なんだったの、今の風は。でも、次はもうない！」

「それは・・・お前も一緒だ！」
向かう円盤を視る。

(・・・線を創り、円盤を包む。潰れる！)

グシャリと円盤が潰れていく。宙を舞う円盤は次々と地へ落ちていく
「な、なんでよ。わたしのシールが」

「俺は、ここを抜ける。だから」
敵を睨みつけ

「お前はここから消えろ、穂波！」
世界を黒い線で円を、それを内側から潰していく

円の外殻まで潰し、世界は破裂した
「え、これって！」

数十メートル吹き飛んだ穂波の声はここまで届かなかった
すべてが終わわり、気を緩めた。

「はああ、疲れた。マジで死ぬかと思ったああ・・・」

「椿、もういいぞ。いくぞー。」
隠れていた椿が出てきた。こちらを見て何かいいたそうだ

「なんだ、何か言いたそうな顔だな」
「眼、というより瞳が金色だよ。どうしたの？」

世界はもう黄金じゃないはずだが、眼は黄金のままらしい
「いや、まあ。あれだ・・・そうだな」

「なにか悪いものでも食べたの？」
「そう！ここに来る前にパン食べたんだ。それが当たったのか

な」
「適当な嘘だ。騙せるはずない。」

「やっぱり」。なんでも口にするからいけないんだよ」

騙せた。なんて純な子なのだろう

「じゃ、帰ろうか。先生はもう帰ったよ。ところでいつから隠れてた？」

「ん？一回注意してからわたしだけ疎外感感じてたからそこから疎外感って最近の子は高度な言葉を話すものだ

二人は校舎へ帰る。あとで保健室で怒られるだろうな

腕に裂けた痕があるなんてどう説明したらいいものか

「式さん、かっこよかった」 また守ってもらおうかな

「冗談。もうこりこりだ。これからは和志に一言いつてからどっかいけ」

笑いながら帰る二人。俺の周りをグルグル回りながらはしゃぐ椿
そのうちこけてしまうのだと思うと気が重かった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1809a/>

空のない月

2011年1月16日04時02分発行